

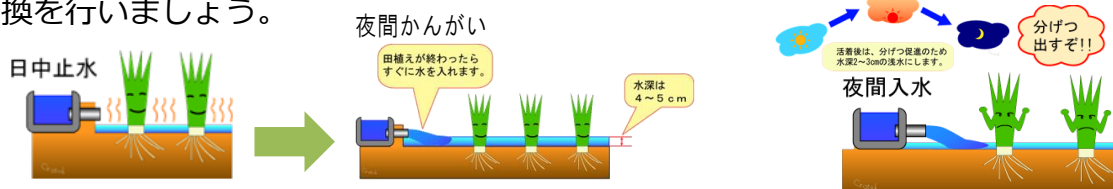
初期生育の確保へ向け、田植えの基本ポイントを再確認！

- ① 適期内「5月15日～20日頃」の天候の良い日を選んで田植え
 - 「つや姫」、「雪若丸」の田植えを優先して行いましょう。
 - 週間天気予報を参考に、低温や強風の日の田植えは避け、できる限り天候の良い日を選んで行いましょう。
- ② 植え込み本数「 m^2 当り100本」程度で植える
 - 栽植密度は70株/坪、株当たり4～5本を目安とします。
- ③ 適正植付け深「3～4cm」が基本！深植えは避ける
 - 分けつの発生を抑制するため、深植えは避けましょう。
- ④ 箱施用剤の適正使用と補植用取置き苗の速やかな除去
 - プール育苗の場合は、プールの落水後に箱施用剤を散布します。また、育苗ハウス内で野菜等の後作を予定している場合は、苗をハウスの外に出してから箱施用剤を散布します。
 - 補植用の取置き苗は、いもち病の伝染源となります。補植作業は田植え後1週間以内に行い、取置き苗は速やかに処分しましょう。
- ⑤ 除草剤の適正使用で効果的な雑草防除
 - 除草剤の使用基準をよく確認し、適切な使用時期の範囲内の早めの散布を心掛けましょう。雑草の葉齢が進むと、除草剤の効果が十分に発揮されない場合があります。
 - 粒剤、フロアブル剤は、3～5cm程度に湛水し散布します。
 - ジャンボ剤、豆つぶ剤等は、5～6cm程度に湛水し散布します。なお、藻類や浮草が多発している水田では、拡散が不十分となり、効果が劣ることがあるので注意が必要です。
 - 除草剤の散布後7日間は止め水とし、田面を露出させないようにします。田面が露出してしまった場合は、ゆっくりと足し水を行います。

※箱施用剤と除草剤（1キロ粒剤）の取り違えに要注意。散布前によく確認しましょう。

田植え後は保温的水管理で分けつ促進！

- 田植え直後は、4～5cm程度の水深で活着を促進させます。活着後は、2～3cmの浅水管理とし、日中止水・夜間かんがいの保温的管理で分けつの発生を促進させます。
- 高温が続くと、表層剥離や異常還元（ワキ）が発生します。ワキが見られた場合には速やかに水交換を行いましょう。



STOP！農作業事故！

春季農作業事故防止啓発運動 展開中！トラクターや田植機等の事故に要注意！

- 安全確認と予防対策（ブレーキ連結等）で公道でのトラクターによる事故を防ぎましょう。
- 圃場へ侵入する際は、傾斜方向に対して平行に侵入する等細心の注意を払いましょう。
- 熱中症にも要注意。こまめな休憩と水分補給。ゆとりをもった作業を心掛けましょう。